# 第二十四章　海面下降

取りあえず逃避することを選択した四人は、まず誰をボスとして行動するのかを決めた。結局ふたりの大家をボスとし、田中と山本の意見を尊重するが、ふたりの大家の意見がまとまらなければ最後はジャンケンで決めるという変則民主主義によることとなった。しかし、こんな仕組みが長続きするはずがない。それよりも先を見すえる対処がいい加減であることをあざ笑うように周辺の環境が急変する。そう、あの不思議なテレビが驚くべきニュースを流した。

「大砂漠で大量の水が湧いて溢れ出しました」

どう見ても湖にしか見えない。

「ここはタクラマカン砂漠でした。一晩でこのように様変わりしました」

「まさか、メキシコ湾に吸い込まれた海水がタクラマカン砂漠に噴き出したとでも」

テレビが田中に応答する。

「そうです。この湖の成分は海水と同じです。これを見てください」

「ク、鯨！　鯨が潮を噴き上げているわ！」

「タクラマカン砂漠だけではありません。サハラ砂漠、それに半島のほとんどが砂漠のアラビア半島でも同じことが起こっています」

それぞれの映像が流れるが、字幕がないのでどれがタクラマカン湖か、サハラ湖か、アラビア湖か区別できない。その雰囲気を感じとったのか、画面は上空からの映像に変わる。衛星から撮影された写真だ。

「ブルー、鮮やかなブルー」

山本が感動する。アラビア湖が周りの海の色とは一線を画す鮮やかなブルーの輝きを放つ。画面がサハラ湖へ、つまり西アジアから北アフリカに移動する。湖のように小さくなった地中海の青緑とはまったく異なるブルーのサハラ湖が画面の左に現れたかと思うと中央部に近づく。そして更に画面は左側、つまり西に向かって移動する。画面上部にあるはずの地中海が見えなくなる。地中海の入口のスペインとモロッコが地続きになっているのだ。やがて大西洋が見えてくるが、見慣れた大西洋ではない。

「キューバやハイチの島がない。地続きになっている！」

「それに南北のアメリカ大陸の東海岸が大きくせり出している」

「それどころかメキシコ湾が巨大なまん丸い湖に見える。あれは！」

メキシコ湾の中心部に巨大な渦巻きが見える。何もかもを吸い込むブラックホール、いやブルーホールと化したメキシコ湾に目が奪われてその周りの状況を見落としてしまう。四人の記憶にある地形、とは言っても安物の地球儀レベルだが、彼らの記憶のレベルを遙かに上回る鮮明な映像が次々と現れる。

やがて太平洋へと画面が進む。太平洋は大西洋ほど海水が極端に減っていないためか、四人は落ち着いて画面を見つめる。それでも大きな島がゴロゴロ見える。しばらくしてから画面の左端に日本列島が現れ始めると、ふたりの大家が合唱する。

「アリューシャン列島や北方四島が北海道と……その北海道も本州と地続きになっている！」

少し時間を置いて田中が叫ぶ。

「東北の太平洋側の海岸線が！」

三陸海岸を含む海岸線がかなり海側に移動している。

「少なくとも大陸棚は陸地化している」

「あの大地震で地盤沈下したところは助かるな。これなら大潮に悩まされることはない」

「何を言っとる。沿岸漁業は壊滅じゃ」

「そうか」

「わあ！　沖縄がとてつもなく大きな島になっているぞ」

「ひょっとして、大西洋のようにもっと海水が減ればカムチャッカ半島から台湾まで地続きになるかもしれない」

「日本海も消滅するかも知れんぞ」

「いったいどうなるんだろ」

やがて中国のタクラマカン砂漠、いや、キラキラと輝くタクラマカン湖が現れる。余りにも巨大な湖に度肝を抜かれる。

「なんと大きな……」

「オーストラリア大陸より大きいかも……」

「いったい何が原因で……」
「メキシコ湾に穴が開いたから？」
「地震？　ハイチで大地震でも起こったのか？」
「確かニューヨーク空港で聞いたあのテレビのニュースでは地震ではないと言っていたような記憶がある」
「あの空飛ぶ潜水艦の仕業か？」
三人の思い思いの発言に割り込むように山本が突然大声をあげる。
「スミスさんとの会話を覚えてる？」
誰からも反応はない。
「『不可思議な謎に挑戦するのが三度の飯より好きな男がいる』と言ってたでしょ」
「思い出した！」
田中が叫ぶとふたりの大家も頷く。山本がふーと安堵の息を出す。
「そしてその男が『今は海の底で謎の物体と格闘中だ』とも言っていたな」
「そうです。スミスさんはこの異変の原因を知っていたんだわ。しかもその原因を作り出した人物までもよ」
「原因？　何を言っているんだ」
田中が興奮気味の山本を心配そうに見つめる。

「詳しく話すわ。想像が入るけれど」

田中は真剣な眼差しで山本を見つめると一言だけ発する。

「黙って聞く」

ふたりの大家も同調する。山本は大きな胸を膨らませてからゆっくりと息を吐いて落ち着きを手にする。

「スミスさんは『面白い男がいる』と言ってたわ。そのときその男が何かをしでかすというニュアンスを感じたの」

一息ついて続ける。

「話は少し逸れるけれど、随分前にスミスさんに付いてメキシコ湾に突きだしたフロリダ半島の地底を取材したことがあるの。そこには至るところに大小様々な洞窟があってかなり大きな地底湖もあったわ。そう！　メキシコ湾の底に巨大な空洞が存在しているとすれば、穴が開くとかなりの海水が取り込まれるかも……」

山本の言葉が途切れる。要はそれから先の推測が不可能だということだ。

「取り込めると言っても知れている。大西洋の海水は間違いなく砂漠に移動したに違いない！」

「その可能性、否定できないわ」

「ひょっとして空飛ぶ潜水艦とやらがメキシコ湾に穴を開けたんじゃ？」

田中が興奮する。

「その潜水艦にスミスさんの言う面白い男が……」
立派な服の大家が田中の言葉を制して冷静に山本を促す。
「もう一度スミスに取材を申し込むべきじゃ」
立派な服の大家の意見に質素な服の大家が同調すると山本が強く頷く。
「すぐ手配します」
そのときテレビから新たなニュースが流れる。
「スミス財団のスミス氏が来日しました」
「えー！」

＊

「スミスが日本に来ている」
「どこに？」
「防衛省の招待だと言っていたぞ」
「なぜ、防衛省が？」
「それ以上のことはわからん」
ふたりの大家の会話に山本が割って入る。
「私に任せて」
テレビに向かって山本が尋ねる。

「聞こえますか」
「その声は山本？　違うな」
テレビの向こう側から聞き覚えのある戸惑い気味の声がする。
「山本です。大幅に体型が変わりましたが。この体型については後ほど説明するとして……」
「そうか。それにしてもどこへ行っていたんだ」
ようやく画面にグレーのスーツ姿の逆田が現れる。
「逆田！」
全員、声を揃えて驚く。
「お前こそ、どこへ行っていたんじゃ」
立派な服の大家がツバを飛ばしながら追求する。その言葉に質素な服の大家が驚くが、テレビの中の逆田の動作に注目する。その逆田が胸のポケットからハンカチを出して顔を拭く。
「大家さん。ツバを飛ばさないでください。大声を出さなくてもちゃんと聞こえますから」
「お前こそツバを飛ばすな」
逆田は大家の怒りを無視して山本に命令する。
「山本、こっちへ来い」
「私、首になったんじゃないの？」
「もちろん、首だった」

「そしたら、なぜ？」
「全員、首になったんだ」
「全員？」
「会社が潰れた、と言うよりは放送免許を取り消された」
「えっ！」
「余りにも本当のことばかり報道するので、記者クラブから閉め出され……」
「それは私がいたときに起こった事件だわ」
「そのあと、政府はもちろん他の放送局からも非難を受けて……」
逆田が涙ぐむ。
「それじゃ倒産したのと同然だわ。でもオーナーのスミスさんが今日本に来ている。私、そちらに行く前にスミスさんに頼んでみる」
逆田は顔をあげると大家のツバを拭いたハンカチで目頭を押さえると、山本の言葉に反応することなく語り始める。
「苦難に満ちた我が社の歴史をご紹介します」
画面は外壁がすべて崩れ落ちた関東電力の原子力発電所に変わる。
「ある意味、この事件がきっかけでした。この事件がすべての始まりでした」
山本は首を傾げると取りあえず画面を見つめる。

「何を言いたいのかしら、逆田さんは」

＊

狭い部屋で全員がテレビの前に並ぶと液晶テレビを製造する工場が映しだされる。そこはタイの日系工場で冠水した大量の白いテレビが映っている。

「このテレビと同じ型だ」

田中が叫ぶとふたりの大家も首を縦に振る。

「我が社はタイで特殊なテレビを製造していました。ご存知のとおりこのテレビはこれまでにない卓越した先進的な機能を持っています。一言で言えば、この世の中で起こり得る出来事を伝えるテレビでした。量産を目指しましたが、あと一歩のところで洪水に見舞われてすべて破棄されました」

「でも、ここにあるじゃないか」

「試作品です。社内の一部の者しかこのテレビの存在を知らなかった。しかも、その試作品が田中さんの部屋にあるなんて驚いたわ」

「山田電気にいた逆田さんから買ったんだ」

「田中さん、あなたは本当に田中さんですか」

山本と同じく体型が変わった田中を逆田が見つめる。

「はい」

山本は逆田と田中の会話を無視して思い出し笑いする。

「このテレビのお陰で大儲けさせて貰ったわ」

「競馬か」

「このテレビの特殊機能をチェックさせて貰うために競馬の放送を利用したの。もちろん、儲けたお金はすべて貧乏放送会社に……」

逆田が山本の言葉を引き継ぐ。

「いずれにしてもこの投資の失敗が我が社の財務内容を悪化させました。田中さんのところにあるテレビを利用して競馬で何回も大儲けして資金を稼ぐ訳にも行かないし……」

質素な服の大家が口を挟む。

「そんなことをすれば、すぐばれてしまうぞ」

「分かっています。だから質素倹約経営に徹底したのです。しかも『事実をありのままに報道する』という方針を変えずにです」

原発事故後に開催された官房長官の記者会見のビデオが再生される。そこには鋭い質問を浴びせる一人の記者がいる。逆田だった。官房長官は見当外れの答弁に終始する。

「真面目に応えてください」

逆田が食いさがると周りの記者からヤジが飛ぶ。

「質問を独占するな」

「私の疑問は、今までの説明の情報源はどこかと言うことと、メルトダウンは起こっていないと言いきれるのかの二点です」
「何度も説明しているとおり情報源は原子力保安院です」
「保安院は現場に行っていません。保安院の情報は関東電力からの情報なんでしょ」
「そこまで把握してません」
「そんないい加減なこと、許されるんですか」
「独占取材の方が許されない」
次々と同業者からのヤジが飛ぶ。しかし、逆田は無視する。
「メルトダウンは……」
そのとき隣の記者が逆田からマイクを引ったくる。肉声になっても逆田は叫び続ける。
「私たちは報道機関だ。政府の広報機関ではない。なぜだ！　なぜ、真実を問い質して国民に伝えようとしないんだ！」
記者たちが逆田を取り囲むと会見場から閉め出す。誰が撮影したのか一部始終が映されている。
「これを機に我が社は報道機関が主催するすべての記者クラブから排除されました」
関東電力の水素爆発を起こした原子力発電所の内部の映像、その付近の状況、更に沖合に浮上したグレーデッドの潜水艦内部の様子等々、生々しい映像が次々と流れる。

「これらの貴重な映像も日本国内ではどこのテレビ放送局も無視しました。ところが海外のメディアは競うように我が社が取材した映像を放送してくれました。インターネットでも配信されました。そうすると益々我が社に圧力が掛かりました。政府や関東電力はもちろんのこと、それより同業の報道機関からの圧力が一番強かった。当然、彼らは否定しますが」

逆田がまるで放送しているような口調で説明する。続けて報道中止にまで追いこまれたものの、残ったスタッフとともに細々と取材を続けてきた状況が説明される。いつの間にか山本が涙を流す。画面はグレーノイズを発するだけで何も映っていない。それでも逆田が報道口調で続ける。

「詳しいことは省きますが、その後、諸外国のマスコミ、それに一部の国民のカンパで何とか食いつなぎました。このピンチにアメリカのオレンジ社、そうjフォン、jパッド・オレを製品化して大ヒットさせたオレンジ社が私どもをバックアップしてくれました」

「クラウド・コンピューティングシステムが普及し始めたころに、ムーン・コンピューティングシステム、更にもっと高度なサン・コンピューティングシステムを普及させたオレンジ社がですか？」

田中が逆田に念を押す。

「そう！　オレンジ社のjパッド・オレはこのテレビの製造技術を基礎に開発されました」

「へー！」

田中が目を丸くする。一方ふたりの大家はキョトンとして同じセリフを重ねる。
「わしには何のことかさっぱり分からん」
「オレンジ社の社長スティーブ・ゲイツとスミスさんは親友です。スミスさんはオレンジ社が倒産しかけたとき、スティーブ・ゲイツの無茶苦茶な要求をすべて飲み込んで増資に応じたという話を聞いたことがあります」
「スミスか」
またもや、ふたりの大家が声を揃える。
「スミスは私どもの放送局のオーナーです。しかし、外国資本は日本の放送局に出資できません。ましてや買収などもってのほかです」
「さっきの話ですが、このテレビの製造技術を流用したとか言ってた話、詳しく教えてくれませんか」
田中が逆田にねだる。
「このテレビの基本設計は高千穂電子光学研究所という会社が……」
「えっ！　あの高千穂電子光学！　ＴＤＫのことでしょ！」
「そうです。もう何年も前の……」
興奮した田中が再び逆田を遮る。
「僕はその高千穂電子光学に就職が内定してました。ところが財テクの失敗による損失隠しが

ばれて上場廃止になりました。当然、僕は内定を取り消された。就職浪人になったとたん、今度は不況で生活すらできなくなった」

「そうでしたか。その後、ＴＤＫは有力会社の草刈場のようになって有能な技術者はうさんむさんとなりました。我が社は何とかＴＤＫのタイ工場でこのテレビの製造にこぎ着けましたが、出荷間近に発生した洪水で、すべて水没しました。ＴＤＫも倒産しました」

逆田の両肩が落ちると山本もうつむく。

「このテレビさえ完成していれば、世界中に素晴らしいニュースを配信できたのに」

田中が山本の肩を叩く。

「ところで元々何の話をしていたんだっけ」

「スミスさんが防衛省にいる話だったわ」

「そうだ。なぜ防衛省にいるんだ？」

「海上自衛隊の鈴木一等海佐に会いに来たらしいの」

「鈴木？」

「若い海上自衛隊員のみならず航空、陸上自衛隊員にも人気があります。それに潜水艦の艦長の経験もあるの」

「いったい何のために鈴木一佐に会いに来たんだろう」

「わからないわ。日本に来ていること自体、さっき分かったことだわ」

「スミスに会いに行く手間が省けた。アポを取れんのか」

質素な服の大家が山本に迫る。するとテレビの中から逆田が叫ぶ。

「私に任せてください」

# 第二十五章　サブマリン八〇八

「国連？」

「海上自衛隊の長距離輸送機でスミスと一緒に鈴木一等海佐が国連に向かいます。現在、日本政府は機能していません」

逆田が息を弾ませてテレビの中で報告する。田中が視線をテレビから山本に向ける。

「総理大臣以下、全大臣が辞任したなんて情けない国になったもんだ」

山本ではなく逆田が言葉を引き継ぐ。

「そのお陰というのか、下士官ですが、今や自衛隊を統率する地位に就いた鈴木の権限で皆さんもニューヨークまでスミスと同行できるようになりました。スミスが鈴木一佐に頼みこんでくれたのです」

「ありがたいわ。スミスさんとじっくり話ができるし、これから何が起こるのか、楽しみだわ」

山本が笑顔で逆田に頭を軽く下げる。一方、田中は少し不機嫌そうに逆田に尋ねる。

「高級官僚も次々と辞任するし、いったい日本はどうなっているんだ？」

「メキシコ湾に吸い込まれた大量の海水に始まった地球規模の気象変動と陸地の進出と海の後退。既存の政府に対応する能力がないのです」

「その非力さは東日本大震災復旧の手際の悪さ、同時に起こったメルトダウンの対処の不味さで露呈していたわ」

山本の職業意識に根ざした解説が今の日本の状態を的確に物語っていた。

「要は、スミスさんはただでアメリカに帰れるし、僕らもただで国連の見学ができるし、もちろんスミスさんに独占取材できる」

＊

スミスとともに田中たちが乗り込んだ飛行機は航空自衛隊の大型輸送機だった。

「甘かったな」

「輸送機であることを忘れていた」

「寒い。とても取材できる環境じゃないわ」

「これを着てください」

離陸が終わってしばらくすると鈴木一佐自ら防寒服を持って現れる。全員、防寒服を着こむとスミスが窓から変わり果てた眼下の日本列島を見つめる。そのスミスに鈴木が声をかける。

「大変なことになりました」

「そんなことはない。暮らし易い地球になるかも知れんぞ」

スミスが窓から鈴木に顔を向ける。

「それならいいが」

「鈴木一佐は暮らしにくい地球になるとでも」

「鈴木で結構です。どちらとも言いかねますが、大西洋の海水がなくなると太平洋も大きな影響を受けるでしょう」

「いいじゃないか。日本はアメリカや中国やカナダそれにロシアも追い抜いて世界一の国土を持つかもしれない」
「なるほど。そう考えれば楽しくなる」
質素な服の大家がスミスの意見に感心する。しかし、鈴木は首を横に振る。
「非力な自衛隊では広大な国土を守りきれない」
「さすが軍人だ。見方が違う」
「そんなに悲観しなくてもいいのじゃ。日本は資源大国になるのじゃ」
「なるほど」
立派な服の大家の言葉に全員納得顔になる。そんな中で山本は手をさすりながらメモを取る。
「パソコンを持ってくるのを忘れたから大変だわ」
「こんなに寒ければパソコンが起動するかどうか」
田中の否定的な言葉にスミスが大きな声を出す。
「どんなに寒くても人間の脳は起動するし作動するぞ！」
山本がスミスを見つめる。
「やっぱり寒い。私は記者として失格だわ」
「そんなことはありませんよ」
「田中さんの言うとおり。ミスひろみは素晴らしい記者だ。それにいつの間にか非常に魅力的

な女性に変身した」

スミスはリングラングを知っているが、そのリングラングの身体を持つ山本に驚くどころか冗談さえ言う。

「いやだわ。スミスさんまでそんな目で見るなんて」

「スミスさん」

田中が遠慮気味に割って入る。

「この輸送機はイースター島上空を通過するんでしょうか」

「それは鈴木一佐、いやミスター鈴木に尋ねるべき質問だ」

「残念ながら通過しません」

鈴木が即答するとスミスがにこやかに言葉を続ける。

「残念ではない。私はある話をしようと思っていたが、すっかり忘れていた。イースター島と聞いて思い出した」

スミスが鈴木、そして田中に軽くおじぎをしてから、フトコロから茶色の小瓶を出す。フタを二、三回回すと口にする。

「なんですか、それは」

スミスが「ほっほっほっ」と笑う。これはスミスが上機嫌のときに出す笑い声だ。その意味をよく知る山本がスミスから小瓶を受け取る。

「身体を温める薬ですね」
山本が一口含むとゆっくりと喉に送る。
「ふー。身体が燃えてきたわ」
山本が田中にその小瓶を渡そうとすると田中は首を横に振る。
「遠慮しておきます。多少この手の薬の飲み方を覚えましたが、このビンの薬は劇薬のような気がしますので」
田中の丁重な断りのあと、鈴木が一言述べる。
「勤務中です」
スミスの術中にはまった全員が寒さを忘れて打ち解ける。山本がそんなスミスにねだる。
「ところで、ある話とは？」

＊

「イースター島海戦で活躍した旧日本軍の潜水艦を知っていますかな」
山本の表情が急変する。
「サブマリン八〇八のことですか」
「ミスひろみがご存知とは驚いた」
スミスは例の笑い声を上げながら続ける。
「サブマリン八〇八のことを知ったのはいつですか」

スミスと山本のやり取りを見つめる鈴木の表情が引き締まる。
「榊艦長……」
と言いかけて山本が言葉を切ると、スミスが突っこむ。
「ひろみ！　榊艦長とはどこで？」
「サブマリン八〇八で」
スミスではなく鈴木が驚く。
「えーっ！」
「ミスター鈴木。こんなことを尋ねるのは失礼かも知れませんが、メルトダウンした関東電力の原子力発電所沖合にグレーデッドの潜水艦がいたことはご存知ですね」
「もちろんですとも！　人質を取られていたので我々は海底でじっと潜伏していました」
「そうでしたか」
「場合によっては潜水服に身を包んだ屈強な自衛隊員を突入させるつもりでした」
「私はそのグレーデッドの潜水艦に乗り込みました」
鈴木は驚いて山本を見つめる。
「グレーデッド自体の取材はほとんどできませんでしたが、治療を受ける被曝した関東電力関係者の取材は自由でした」
「すごい！」

声をあげたのは鈴木だけではなかった。立派な服の大家もじっと山本を見つめる。そしてスミスが静かに口を開く。

「要はイースター島海戦でグレーデッドの潜水艦から脱出してサブマリン八〇八に救助された。そして榊艦長に出会った。そう言うことかな？　ミスひろみ」

スミスの結論的な説明に全員が納得する。しかし、鈴木だけは感心しながらも山本に短い問いを投げかける。

「治療を受けた電力関係者のその後の足取りは？」

山本は少し間を置いてから応える。

「宗教的に言えばグレーデッドに『帰依』したという言葉が一番ピッタリです」

「彼らに対する治療はどういうものでしたか？」

「完璧でした。通常なら死んでもおかしくないぐらい被曝した人でも助かりました。他の人は誰ひとりガンの症状を発症することはありませんでした」

「なぜ、そんな高度な技術を持っているんだろうか」

「想像ですが、彼ら全員が被曝経験者でガンなどに対する治療法を自ら開発したんでしょう」

「信じられない」

「残念ながら治療現場は取材できませんでした」

「だから想像と前置きしたのか」

「そうです。私が取材できたのは被曝した原発の作業員だけです。治療前は直に取材しました。年齢、家族構成、住所、関東電力との関係、担当部署、作業内容、その時間、作業開始月日、休憩時間、食事、給料……私の質問に即答する作業員は皆無で、貝のように口を閉ざす人ばかりでした。気長に治療待ちの作業員に世間話をして打ち解ける努力をしました。その甲斐があってか、それとも女の私に同情してくれたのか、ポツポツと話し出す人が増えました」

誰もが黙って山本の話を聞く。

「そう、一人二人と、あるいは複数で私に語りかける人が徐々に増えました。潜水艦内の医療設備は多数の患者を治療するには余りにも貧弱でしたが、被曝線量の多い順番に治療が施されました。私は特別な部屋を与えられて、と言っても畳二枚ほどの狭い部屋でしたが、聞き取った資料をモバイルパソコンで処理しては取材するという日々を過ごしました。風呂に入れないことが最大の不満で快適な環境ではありませんでしたが、毎日が充実していました。しかし、グレーデッドの人間と治療を終えた作業員とは顔を合わすことがありませんでした。最後の作業員が治療を受けると取材できる作業員はいなくなりました。編集した取材資料を取り上げられてしばらくの間、私は狭い部屋に監禁されたままで外には出られませんでした。女としては屈辱的な生活を強制されましたが、数日後、大音響がするとドアが開いたので部屋の外へ出ました。煙だらけで浸水がひどく何とかタラップを上って気が付けば私は甲板に立っていました。目の前には大海原と遠くに島が見えました」

「そこは？」

「イースター島海域でした。もちろんそのときは分かりませんでした。サブマリン八〇八に救助されてから分かったのです」

「救助されるまでは？」

鈴木が尋問するような口調と視線を山本に向ける

「寝るときもライフジャケットを身につけていましたから、とにかく海に飛びこみました。乗組員や作業員もです。しばらくして別のグレーデッド潜水艦が浮上してその乗組員を救助しました。私は離れるように飛びこむ前に見えた島を目指して泳ぎました」

＊

サブマリン八〇八の診療室で防護服を着たドクターがガイガーカウンタを片手に山本を診察する。激戦でとても診療室とはいえない乱雑になった狭い部屋でドクターが声を出す。

「かなり被曝している。生きているのが不思議なぐらいだ。しかし、心配はいりません」

そのとき艦長の榊が入ってくると、ドクターに一瞥するだけで何もしゃべらない。ドクターは頷いて榊から軍服と油で汚れたような黒いタオルを受け取るとそれを山本に押しつける。

「男用しかない。それにシャワーが使えない。これで身体を拭きなさい」

ドクターは服と黒いタオルを手渡すと榊とともに部屋を出る。ドアが閉まるのを確認してから山本はタオルに鼻を近づけるが油臭さはなかった。しかし、とてもそのタオルで身体を拭く

気にはならない。取りあえず腕をまくって恐る恐る拭いてみる。すると不思議なことに腕が黒くなることはなく汚れが取れる。逆にタオルの一部が白くなる。

「何かあるわ」

山本は意を決して全裸になってそのタオルで用心深く全身を拭いていく。しばらくすると身体がまるで風呂に入ったようにさっぱりする。一方、タオルは真っ白になっている。鏡がないので体勢を変えながら自分の身体を確認する。そのときドアをノックする音がしてドクターの声がする。

「入ってもいいですか」

「少し待ってください」

山本は慌てて軍服を着る。

「どうぞ」

ドクターがガイガーカウンタを山本に向けて目を丸くする。

「放射線量が激減している」

「えー」

「その雑巾のようなタオルには不思議な物質を染みこませていた。分かっているのは黒いこと、放射線を吸収すると白くなること。それ以上の説明は勘弁してくれ」

ドクターが山本の肩をポンと叩く。

「ありがとうございました」
「なぜ、こんなところで海水浴をしていたんだ」
「グレーデッドの潜水艦から脱出したのです」
「なに！　グレーデッドの潜水艦！　すぐ艦長に報告してくれ」
「ここは？」
「サブマリン八〇八。今、イースター島海域にいる」
「イースター島……」

＊

「もっと詳しく聞きたいが、私は国連の総会に出席しなければならない」
そのとき天井のスピーカーから声がする。
「鈴木一佐。アメリカ空軍機からの通信が入りました。今から本機を護衛するとのことです。機影確認中です」
「わかった。そちらへ行く」
鈴木はまずスミスに、そのあと山本に、そして大家たちに敬礼をして背中を向けると機首に向かう。その背中を見つめて山本が呟く。
「気持ちのいい方ですね」
スミスが大きく頷いてから山本を見つめる。

「だから一佐の地位でありながら、日本の臨時代表になったのだ」
「日本の代表？」
「選挙で選ばれていないから暫定代表だが、大したものだ。無名だったのにすでにかなりの国民に慕われている」
「スミスさんは何でもよくご存知ですね。ところで鈴木一佐には特殊な能力でもあるのかしら」
「大ありだ。彼は超能力を持っておる」
「超能力？」
山本だけではなく全員がスミスに身を乗りだす。
「教えてください。スミスさん」
山本がスミスの腕を取る。
『必ず責任を取る』という超能力」
「なるほど！　今の日本には責任を取る人間なんて誰もいない。だから責任を取る人はウルトラマンなんだわ」
「ウルトラマンか。意外と古いことを知っているんだな」
田中が妙に感心すると質素な服の大家が感動したような面持ちでスミスに話しかける。
「見落としていた。責任を取らないことが日常茶飯事だったから、責任をきちっと取る人間がいれば英雄扱いされることを」

立派な服の大家も同調する。

「情けないことじゃ。政治家や官僚で現役のときはもちろん、責任は取らない。ましてや、やばくなると雲隠れ同然に仮病で入院したりする。そしてほとぼりが冷めてから、当時の責任などそっちのけで偉そうなことばかり言う」

ところが、スミスは反応することなく黙ってしまう。

「スミスさん！」

山本は思い出したように声を上げるが次の言葉を飲み込む。鈴木がスミスたちの前から姿を消したので、鈴木に話題が移ったが、イースター海域でのグレーデッドや榊艦長やサブマリン八〇八の話を披露した山本にスミスはほとんど反応しなかった。山本にしてみればスミスが根掘り葉掘り質問するものと覚悟していたにも関わらずだ。

拍子抜けした表情で山本はスミスの唇の周りに貯えられた白い髭を見つめる。そしてスミスが小瓶に入った例の薬をチビチビと口に含む姿を見つめ続ける。そして山本は小膝を叩くと心の中で叫ぶ。

――スミスは知っているんだわ。イースター島海戦でサブマリン八〇八が遭遇した出来事を。だから、サブマリン八〇八を手に入れたんだわ。

スミスは小瓶に栓をすると眉間にシワを刻む山本に微笑みかける。

「ミスひろみ。悟りましたな」

「えっ。スミスさんには分かるんですか」
「ひろみの顔に書いてある。ほっほっほっ」
「教えてください。サブマリン八〇八はイースター島海戦で何をしていたのですか」
「国連軍の一員としてグレーデッドと戦った」
「それは承知しています」
「その戦闘中に何が起こったのか。それを知りたいのでしょ」
「そのとおりです。教えてください！　スミスさん！」
「だから、日本政府からサブマリン八〇八を譲って貰ったのです」
「それでスミスさんの疑問は解決したのですか」
「今は勘弁してください」
「分かりました」
山本がスミスに頭を下げると立派な服の大家がスミスに語りかける。
「今回の日本訪問の目的は？」
「サブマリン八〇八の古い航海日誌を手に入れるためです」
「ちょっといいですか」
田中が口を挟む。
「黒いタオルっていったい何なのでしょうか。スミスさん」

田中の質問に山本が頷くとスミスが真顔で応える。
「私が知りたいのはまさしくそれです。榊艦長の記憶に曖昧な点があったので当時の航海日誌を閲覧してコピーをいただきました」
「何か分かりましたか」
「今のところ、成果はありません。しかし、専門家が読めば何か分かるかも知れません」

＊

スミスタワービルで日本の現状を理解した大家たちは折角アメリカまで来たのに日本に戻ることにする。
「大変なことになっている」
「あんなに大臣の椅子にしがみついていたのに、なぜ、さっさとやめたんだろう」
「高級官僚までが同じように」
「こんな大事件が起こったのに何てことじゃ」
「だけど不思議だわ」
「何が」
「大震災や原発事故の時でもみんな大臣の椅子に居座り続けたわ」
「今度の海水がなくなる事件で日本のように政治家や官僚が雲隠れした国はあるんだろうか」
「ありませんね」

スミスが応える。そして続ける。

「昔々、東京で二・二六事件というのがあったのはご存知かな」

アメリカ人のスミスからの意外な言葉がふたりの大家を刺激する。田中は何のことか分からずに首を横に振るが、山本が記憶を絞り出すように解説を始める。そしてその解説が終わるとふたりの大家が同時に感心して山本を見つめる。

「古い事件なのによく知っておる」

「しかし、じゃ。先の大戦の少し前に若い将校が起こしたクーデター未遂事件と今回の事件とどういう関係があるのじゃ？」

山本も首を捻りながら大家たちからスミスに視線を移す。スミスの髭が動く。

「今回の事件は引き金です。財政は破綻して年金の財源が底を突く。健康保険制度が機能しなくなって、次々と事故を起こす原発の廃炉もままならないし停電もひっきりなしに起こる。金持ちは海外に移住するし治安は最悪だ。閉塞感の漂う社会に日本国民は右往左往するのみ。しかし、あの大震災と原発のメルトダウンの経験をした国民は自制心を持っている。二・二六事件と同じような事件が起こりかけたとき、待ったを掛けた自衛隊員がいました」

「鈴木一佐？」

「ミスひろみ。いい勘をしている！」

スミスがほっほっほっと笑う。

「どうやら、皆さんは時間に翻弄されている」
「時間に翻弄されている？」
「余りにもこの時代のことを知らなすぎる……そうでしょ？」
山本が小さく頷くと両手を広げる。
「鈴木一佐は何をしたのですか」
「何もしていない」
山本はおろか全員が拍子抜けしたようにスミスを見つめる。
「二・二六事件は未遂に終わりましたが、その後日本の軍部は先鋭化して結局、ブレーキがなくてアクセルしかない自動車のように大戦に突入しました」
全員スミスの日本に対する知識の豊富さと分析力に何も言えなくなる。
「鈴木一佐は本能的に過去の大きな過ちを避けようとしたのです。大した人物です。彼は日本のみならず地球の救世主になるかも知れません」
辛うじて声をあげたのは田中だった。
「これから僕たちは何をすればいいのでしょうか」
スミスはこれまで以上に例の笑い声を高々と発する。
「先ほど帰国すると決めましたね」
「はい」

返事をしたのは田中だが、スミスは山本に視線を変える。
「あなたが、いえ、あなたの放送局が得意としていた現政権や制度批判はもういいでしょう」
「えっ」
山本が短く反応する。
「散々いい加減なことをやってきた政治家や官僚は責任を回避するために職を辞しました」
「目的は達せられたと言うことですね」
「そうじゃない！　ミスひろみ」
珍しく目頭をあげてスミスが山本を睨むと、戸惑いながら山本は弱々しく首を横に振りながらスミスを見つめる。
「目的はずっと先にある！　今度は明るい未来のために頑張るのだ。ミスひろみ」
「分かりました。日本に戻って前向きな報道します」
「分かってくれましたか。まだまだ古い考えを持った公務員や官僚化した大会社が存在しています。地球環境の激変に立ち向かうためには批判的な報道は必要です……しかし、一方で閉塞感漂う暗い雰囲気を一掃する必要があります。あなたの力を必要としています」
「私にはスミスさんが思われるほどの才能はありません。でも、やってみます」
山本はスミスに近寄ると握手する。その手は老人の手とは思えないほど張りがあってかつ柔らかくて、そして暖かかった。

# 第二十五章　サブマリン八〇八

# 第二十六章　分離

「スミスさんはね、私たちが徹底的に不公平や不正を分かり易く報道してきたので、おとなしかった国民をこれ以上ごまかすことができなくなったのと、海水が消滅するという未曾有のどうしようもない大事件が起こって、政治家や高級官僚が仕事を放りだしたとおっしゃったの」

「日本だけだよ。そんな醜態をさらけ出した国は」

逆田が苦笑いする。

「これからどんな報道をすればいいものか。零細報道機関の私たちの会社には荷が重すぎる」

「そんなことはないわ。これまでも大手の放送局と互角に、いえ互角以上にやってきたわ」

「そうだった！　確かに」

逆田が誇らしげに胸を張る。

「でも絡まった糸をほぐして、これからの日本の方向性を報道するのは大変だわ」

「肯定するつもりはないが、逃げ出した政治家たちの気持ちが何となく分かる」

山本が逆田に相づちを打つ。

「制度の改革的な見直しを絶えずしなければならないのに、利権争いに目を奪われて元々いい加減だった法律をいじくりまわすから制度に背骨がなくなった。しかも継ぎ接ぎだから元の形がまったく分からない怪物になってしまった。その怪物が国民を襲うようになったので大騒ぎしたけれど遅きに失したと言うことだわ。更に既得権というコバンザメが怪物に絡まるようにうようよしている」

「山本さん、成長したな」
逆田が山本を眩しそうに見つめる。
「スミスさんの受け売りよ」
「そんなことはない。しかし、民意を問うことなく野ざらしにしていたし、国民の方も自分のことなのにほったらかしにしていた。結局大きなツケが回ってきた」
「どちらもどちらね。でも今は違う。何とかなるんじゃないかしら」
「限られたスタッフでこれから何を報道すればいいのか、アイディアは？」
「小さなことから始めましょ」
「小さなこと？」
「そうじゃ。小さいことからでいいのじゃ」
逆田がいつの間にか放送室に入ってきたふたりの老人に気付く。一緒にいる田中に気付かずに尋ねる。
「どちら様ですか」
「逆田さん、驚かせてごめんなさい。紹介します。スポンサーの大家さんです」
「逆田です。しかし……」
狼狽える逆田に山本がにこやかに説明する。
「双子じゃない。一人の人間なんですが、なぜかふたりに見えるのです」

逆田は同じくにこやかな表情で握手を求めるふたりの大家の前で立ちつくす。
「無駄遣いはダメじゃが、資金の心配は要らん」
「ありがとうございます」
逆田はかがんで握手する。
「逆田さん」
ようやく逆田は大家の後ろにいる男に気付く。
「覚えていますか」
逆田が軽く首を横に振る。
「山田電気であなたからテレビを買いました」
逆田は首を傾げたまま田中を見つめる。その田中が不気味に微笑む。
「こうすれば、思い出すでしょう」
田中の身体が細くなって背丈も縮む。
「田中さん！」
山本が叫ぶと両大家がカニのように泡を吹く。佐々木の身体だった田中は元の自分の身体を取り戻すかのように全身をヘビのようにくねらせる。そして元の身体に戻る。まるで小学生が大人の服を着ているように見える田中が逆田に近づく。
「あっ！」

逆田が元の身体だけではなく、元の顔に戻った田中の目線から逃げる。
「あのときの……」
ドサッという音とともに山本と両大家が倒れる。
「あれから僕の人生はがらりと変わりました。お礼を申しあげなければと思っていました」
逆田が腰を折り曲げると山本の頬を叩く。そして息をしているのを確認すると田中を見上げる。
「あのテレビ、決して高い買い物ではなかったでしょ」

＊

両大家の体調が回復したころを見計らって山本が逆田に尋ねる。
「逆田さんはあのテレビの秘密を知っているんでしょ？」
「あのテレビは真実を報道するテレビでした」
「それは分かっています。秘密を知りたいの。それに私も元の身体に戻りたい」
「タイの工場ですべて水没したことは説明しましたね」
「はい」
「すべて水没したのに、なぜ僕にあのテレビを売ろうとしたのですか」
田中が冷静に逆田に尋ねる。
「今はあのテレビの説明だけします」

「？」

「濡れた段ボールを開けると水滴のついたあのテレビが入っていました」

逆田は目を閉じてこめかみを押さえる。

「段ボール箱からテレビを取り出すと持った手から青白い火花が線香花火のように現れると私とテレビを包みこみました」

逆田の顔が苦悩にゆがむ。

「そのあと、何がどうなったのか記憶はありませんが、私は必死になって目の前の田中さんにあのテレビの売り込みをしていました。『このテレビは田中さん以外売ってはいけない』と……」

山本が大きな胸を精一杯膨らませると息を吐きだす。

「田中さんの隣に住むことになったのは……えーと、確か……」

山本は自ら大きな胸を鷲掴みすると苦しそうに悶える。両胸から両手を頭に移して髪の毛をかきむしる。すると胸がしぼむように収縮し始める。胸だけではない。少しはばかることなので簡単に説明するが、リングランの体型に合った服が滑り落ちるように床に到着するとほぼ裸に近い状態になる。しかし、山本は恥じらうこともなく、元の顔と身体を取り戻してガッツポーズを取る。そして周りの複雑な視線に気付くと床の服を拾い集めて身体にまとう。

# 第二十七章　公務員とボランティア

「身体が軽い。何でもできるような気がするわ」

田中の狭い部屋で山本がおどけて見せる。そのとき例のテレビに鈴木一佐が現れる。

「日本の国土は世界一になりました。しかし、福島原発の放射性物質の拡散、そして老朽化した各地の廃炉作業中の事故で我が国は汚染国家のレッテルを貼られました。しかも巨額の財政赤字」

深刻な内容の話なのに鈴木にはなぜか余裕が感じられる。

「随分前になりますが、総理大臣はもちろんのこと全大臣が辞任し高級官僚も責任追及を恐れて辞職しました。その直前に危機的財政赤字に対して増税が決まりましたが、多くの資産家が海外に逃げ出しました。もちろん資産家が多い国会議員も日本国籍を捨てて外国人になりました。さて、皆さん……」

テレビに視線を固定したまま山本が感想じみた言葉を発する。

「鈴木さんって軍人なのに、しゃべり方が柔らかいわね」

田中は頷くだけで画面を直視する。ふたりの大家も黙って画面を見つめる。

「数は少ないとはいえ、国会議員と高級官僚が抜けると、意外なことに財政がにわかに改善されました」

「まさか」

「彼らの歳費や給与は高いと言っても人数が知れているので、その額は知れています。しかし、

彼らがいなくなってから、行政が停滞してかなりのバラマキが止まったのです。つまり、無理して働くのを止めて会社を休んだら健康になった」

山本が小膝を叩く。

「鬱病の人が退職したら、鬱病が治ったというのと同じだわ」

「そんな単純なことではありません」

まるでテレビの中の鈴木が山本をたしなめているような感じがする。

「一番大きな原因、つまり、財政危機を救ったのは地方公務員がボランティア化したことです。このことについては後ほど説明するとして……」

鈴木が言葉を区切る。鈴木の姿が消えて日本列島、いや日本大陸の地図が現れる。

「もちろん、地方の有力者も海外に脱出しました。そのとき土地をスーツケースに入れて外国に行くことは不可能です。そうすると不動産を売ってお金にして外国に行くしかありません。ところが日本の領土は世界一になりました。海から近いところにあった都市のほとんどが都市として機能しなくなりました。更に土地は有り余っています。地価は急落して売るに売れなくなりました。一方、開拓すべき広大な土地が目の前にあります。そうです。日本は資源大国になりました。原油やＬＰガスの埋蔵量は世界一です。金やプラチナ、そしてレアメタルもです。こんなはずじゃなかったと、今になって責任を放棄して逃げ出した政治家や高級官僚や資産家が再び日本に戻って昔の権利を主張し始めていますが、ここで国民の皆様方に相談したいこと

があります。ご存知のとおり海面の後退による世界危機に対応するため私は国連の実務総長に任命されました。しかし、日本のことが気がかりです。私はどうすればいいのでしょうか」

鈴木の人柄がそのまま伝わってくる。日本大陸の地図が消えると鈴木が深々と頭を下げる。そして逆田が鈴木の横に現れる。

「今までの首相が悪すぎました。マニフェストに書かれていることを無視して、書かれていないことに不退転で望むと頑(かたく)なに突っ走る元首相。津波で損傷した原子力発電所の不手際な対応しかできなかった元首相。巨額の贈与税を脱税していた元首相。漫画と酒をこよなく愛して国民を愛さなかった元首相。すぐに仕事を投げだす元首相」

鈴木は逆田の横顔を見つめて黙って頷く。

「それに失言暴言、勉強不足の大臣。そんな人たちが過去の実績を誇張して日本に戻ってきました。受け入れる訳にはいかないでしょう。なぜなら同じ過ちが繰り返されるからです」

田中がテレビの逆田と横にいる山本に問いかける。

「鈴木さんがなぜテレビに出ているのか分からないけれど、この放送はこのテレビしか見えないんでしょ？」

山本が間を置かずに返答する。

「もう、私たちの放送はこのテレビだけではなく誰でも視聴できます。会社は小さいですが、今や全世界に対して放送できる有力なメディアになりました。もちろん超特殊な画面はこのテ

レビでしか見られませんが」

山本が胸を張ると逆田も誇らしげに語り始める。

「数々の苦難が私どもの放送局を成長させました。しかし、真実をそのまま報道するという姿勢に変わりはありません。真実というものは器用なやり方、逆に不器用な対処のどちらからも無縁です。その中立的な立場は崇高なものです。それを失えばすべてが終わります」

＊

「現実な対処方法は？」

「わしは橋本に任せてはと思うのじゃ」

「橋本？」

「この街の市長は橋本という三〇代の若い市長じゃ」

「市長をいきなり国政に？」

山本に追従するように田中が立派な服の大家に尋ねる。

「どんな人なのですか」

質素な服の大家が続く。

「前の市長はいい加減な市長だった。誰が市長になっても同じで市長選の投票率は全国最低だった。その結果二十年もそいつは市長の椅子に居座りよった」

立派な服の大家が続く。

「橋本市長の基本的な考えは明瞭じゃ。公務員は国民や住民の公僕ではなく、単なるボランティアで、給料が高いとか安いとか、九時から五時までしか働かないとかというのはもってのほかじゃと言っとる」

テレビに橋本市長が現れる。

「若いわね。それにハンサムだわ」

山本の言葉に反応したのか、画面の橋本がしゃべり始める。

「本来、人のために無欲で奉仕すれば結果として誰もが感謝の気持ちを抱くはず。一方、倒産することもなく給与が保証されているにもかかわらず、公務員は国民や住民に奉仕するのが責務なのに、奉仕どころか国民たちに牙をむくことさえある。最近でこそ窓口の対応は丁寧になっているが親切だという感じはない。慇懃(いんぎん)無礼で有名な都銀の窓口対応といい勝負をするぐらい住民に不快感を与えることが日常茶飯事だ。ところで今回の震災ボランティアの活躍を見よ。自費で被災地へ向かい無償で必死になって被災者の手伝いをする。これが本来の意味での奉仕活動だ。公僕だと言われている公務員ではなくボランティアが実践している。もちろん、自衛隊員や警察官の活躍は目を見張るものがあった。それに被災地に派遣された地方公務員の活躍も素晴らしかった。しかし、彼らは休みを取って被災地に向かったのではなかった。ただし現場では給料を貰っているだけの仕事以上に彼らは頑張り、さすがにプロだという対処をした。それに比べれば確かにボランティアは一所懸命努力したが、非力であったことは否定できない。

しかし、被災者のそばにいて心のよりどころになったのは賞賛すべきだ。しかも現場に馴染むと専門家顔負けの作業をこなした。そう、このボランティア精神を公務員たるもの徹底的に学ばなければならない。極論すれば、公務員を全員首にしてボランティアと入れ替えてみるという社会実験をしたいぐらいだ。過激かも知れないが、それぐらいの意識改革が今の公務員には必要だ。私は市長だ。大した仕事もせず、通り一遍の答弁を繰り返してばかりすれば、やがて選挙で首になる。ところが公務員にはそれはない。不祥事を起こさない限り、大した仕事もせずに通り一遍の報告書の作成に専念しても首にはならない。民間なら即刻首だが、無償のボランティアでも気持ちが入ってなければ被災者は煙たがる。そのボランティアは失意のなか被災地を離れるしかない。無償だからと言って許されない場合がある。ましてや民間より高い給料を貰って、短い時間しか働かない公務員を住民がいつまでも許容するはずがない。ここは危機感を持って、そしてチャンスだと思って住民のために心底真面目に働いて欲しい」

ここで逆田の声が流れる。

「これは橋本市長が就任したとき職員幹部に対しての訓示の一部です」

田中が感動する。

「すごい！」

「あほ。常識を言っただけじゃ」

立派な服の大家に質素な服の大家が反論する。

「アホはお前だ。常識が通用しないこの世界でよくぞ言いきったと拍手を送るべきだ」

テレビの中から逆田がふたりの大家に微笑みかける。そしておもむろに口を開く。

「次にこれをご覧ください」

「野口総理大臣だ」

「これは復興庁が発足したとき復興庁幹部に行った訓示です」

総理大臣が背広の裏ポケットからなにやら取り出すと広げてマイクやボイスレコーダーが並んでいる演台に置く。そしてその何やら、すなわちスピーチの原稿を読み上げる。

「復興庁の職員になられた皆様に心よりお祝い申しあげます。地震、津波、そして原発事故の三重苦に被災者が苦しんでいます。このような状況を少しでも改善しようと各省庁はそれなりに尽力してきたことを国民並びに被災者も十分理解していますが、何分数百年に一度あるかないかの未曾有の大災害に対して各省庁の対応の一部が機能していません。そこで強い権限を持った復興庁の発足にたどり着きました。復興に対処すべく各省庁から生え抜きの皆様に……」

「この期に及んで何を言いたい！　復旧すらできてないのに軽々しく復興など言うもんじゃない」

総理大臣の訓示のビデオが消えると逆田が立派な服の大家に目線を移す。

「具体的な訓示は復興担当大臣がするのでこのような訓示になったようですが、続きを見ますか」

拒否したのは質素な服の大家だった。

「もういい」

しかし、田中がリクエストする。

「復興担当大臣の訓示は？」

「聞かない方がいいと思いますが、ご要望なので……」

画面に復興担当大臣が現れる。

「……今までの縦割りではなく、復興のために各省庁の協力を取りつけて横断的に被災地、被災者に対して最大の支援をするために復興庁が創設された。皆さんは関係各省庁から選ばれたエリートです。出身省庁で培った経験を被災者のために最大限活用するとともに、具体的な対応策を検討して、復興事業を推進しなければならない。そのためには関係各省庁と連携するとともに、被災した県の知事や市町村の首長の要望に耳を傾けると同時にその要望の分析並びに可能性を精査して検討に値すると判断されたときは、実行可能かどうかを各省庁に判断を仰いだ上でスピード感を持って復興計画を立てて頂きたい。以上です」

「なんだ？　これは」

「だから聞かない方がいいと言ったのです」

「復興の最高責任者の訓示がこの程度なら、先が暗いわね」

「橋本市長は訓示のあと幹部職員を解放することなく、そのまま具体的な施策を矢継ぎ早に幹

部全員に指示した。自分の部署に関係する、しないということなど無視して全幹部に指示してこれからすべき施策を共有させた。こんな細かいことと思われることまでくどいぐらいに徹底した。そして最後に次のように言い放った」

復興担当大臣と違って若くてはつらつとした橋本市長の訓示画面に戻る。

「幹部に裁量権があるのではなく裁量権は市長にある。だから私が責任を持つ。もし勝手に裁量権だと言って中途半端な施策をして効果が上がらなければ、解職又は降格させるとともにその施策が遂行されるまで責任を取らせる。責任を取らない行政は行政ではないことを肝に銘じて欲しい」

「総理大臣や復興担当大臣と違うな。言っていることが明瞭簡潔じゃ」

「なぜこんなにも違うんだろう」

山本が応じる。

「最大の原因は人事権。市長は市職員の人事権を持っています。でも、総理大臣はもちろんのこと、復興担当大臣も人事権を持っていません。しかも復興庁の職員は各省庁からの単なる出向人事で復興庁に転籍した訳ではありません。いずれ出向元に戻ります」

「そうか。でも単なる出向だとしても、いい加減な仕事をすれば元の省庁に帰れないんじゃ？」

田中が食いさがる。

「いいえ。忠実に彼らは元いた省庁のために働くわ。彼らは被災者やその県の知事、市町村長

のために働くのではなく、残念ながら顔は出身母体の省庁に向いている」
「そんな」
田中はうつむきながら顔を横に振るが、両大家は弱々しく首を縦に振る。
「これが現実じゃ」
「そのとおり」
「だったら、なぜわざわざ復興庁を造るんだ！」
田中がキッと顔をあげて両大家に噛みつく。
「そうだ！」
「確かに田中さんの言うとおりじゃ」
「パーフォーマンスね。一所懸命やってますよっていう言い訳」
「そんなことして何になるんだ」
「決断と実行のその日暮らし。ただそれだけ」
両大家が山本を見つめる。
「山本さん。あんたは大した人物じゃ」
先に立派な服の大家が反応する。先を越された質素な大家が続ける。
「震災後の日本の現状を見事に表現した名言だ」
山本は両大家の言葉を無視してテレビに向かって叫ぶ。

「日本だけでなく海面下降という地球全体の難問が起きた今、何とかしなければ！」

テレビの中で逆田が頷く。

＊

「海面下降の問題はさておき、本日は遅々として進まない震災復旧について議論したいと思いますが……」

逆田がそう言いかけて絶句する。そして久しぶりに画面右端のみの映像に変わる。そこには逆田ひとりが映っている。それ以外は真っ黒で何も映っていない。

「誰がこのような人選をしたんだ」

逆田が独り言のように疑問を呈する。

「今やこの番組に出演したい人が一杯います」

画面の外から声がする。

「だからといって……」

逆田の姿が消えると画面全体に著名な人々がコーディネーターとして着席している様子が映しだされる。狼狽え気味の逆田が何とか声を絞り出す。

「復旧費用を捻出する名案はないものでしょうか」

すぐ、ある政治評論家が提案する。

「公務員の給料を下げればいいのです。消費税の増税で費用を賄おうという議論もありますが、

まず、国会議員の歳費とその定数の削減。これは国会のリストラで国民に対してのアピールです。そして国家公務員の給料のカットをします」

「なるほど」

これもまた著名な経済評論家が間髪を入れずに付け加える。

「単純計算すれば十パーセントカットで約三兆円捻出できます」

元知事が首を横に振って反論する。

「そのような単純な意見は慎むべきです。公務員の給料を下げればそのぶん消費が減ります。そうなれば、そのぶん経済が縮小します」

「あなたは経済法則を知らない。カットした三兆円を被災地で消費して貰うから、問題はない」

「いずれも間違っている。給料を減らせば公務員のやる気がなくなって復興の仕事をしなくなる」

「元々大した仕事をしていないじゃないか。公務員は」

「ギリシャほどではない」

「そんなことを言うとギリシャから抗議されるぞ」

「ま、待ってください！」

たまらず逆田が割って入る。そしてコーディネーター一人ひとりに頭を下げる逆田の姿が画面に現れる。

「大変失礼しました。コーディネーターの方々の紹介を失念していました。画面向かって左から……」

逆田が丁寧にコーディネーター一人ひとりの名前と簡単な経歴を披露してから質問する。

「失礼を重ねますが、皆様方の年収はどれほどなんでしょうか」

全員、絶句する。

「今度は視聴者の方々にお詫びを申しあげます。今回の討論、人選に問題がありました。改めて庶民的なコーディネーターを人選して再度放送しますので、ご容赦ください」

逆田は画面に背を向けると再びコーディネーターに頭を下げる。中にはやじる者もいる。

「放送局の社員やキャスターも高給じゃないか」

「他の放送局の実情は知りませんが、私どもの放送局の賃金水準は劣悪です。しかし、仕事に手を抜くことはおろか誇りを持って働いております。今まさに、私どもは大きな過ちをしてしまいました。すなわちテーマに則したコーディネーターの人選をすべきなのに、非常に失礼な話ですが、人選を誤りました。誠に申し訳ありませんでした」

バタバタと大きな音がするとコーディネーターは椅子から立ち上がって逆田を睨みながら次々と退場し始める。

「法的手段に訴える」

何人かのコーディネーターが悪態をつきながら姿を消す。そして画面が消える。質素な服の

大家がすかさず感想を述べる。
「非があれば、躊躇せずその非を認め、詫びるとともにやり直す。なかなか、できんことだ」
「逆田、大した男じゃ」
ふたりの大家がお互いを見合わすと頷く。

＊

「前回は大変失礼しました」
逆田が深々と頭を下げる。
「今回お招きしたコーディネーターは年間所得が五百万円以下の方々です。ご紹介いたします」
逆田が順番にコーディネーターを紹介していく。
「過去三年分の所得証明書と納税証明書を提出して頂きました。三年間の所得の平均が五百万円以下の評論家と言うと、余り売れっ子ではない評論家です。もちろん著名な方もいらっしゃいます」
「有名な割には儲かりませんな。この職業は」
年配の男のコーディネーターが苦笑する。
「納税証明書まで取り寄せて頂いたのは、議論して頂く内容から当然なのですが、税金を滞納している方をコーディネーターとしてお招きする訳にはいかないからです。大変失礼なお願いをしましたことをお詫び申し上げます」

「滞納者でないことが世間に知らされることに感謝します。でも、よく儲けていても五百万円というのがばれて、いささか恥ずかしいわ」

ラフな格好の若い女性が笑いながら照れる。

「個人情報は漏らしませんので、安心してください」

「ほぼ漏れているわ」

「我々は職業柄、個人情報については気にしていない。マスコミに姿を露出するのが仕事だから保護して頂く必要はない」

「個人情報保護が少し過剰すぎますね」

「分かりました。ところで本日、議論して頂きたいのは個人情報保護法ではなく増税についてです。ご存知のとおり、地震、津波、放射能汚染で復旧が待ったなしの被災地、被災者に対する予算を確保する方法としてもう二年以上増税が叫ばれていますが、未だ、復興どころか復旧の法律すら成立していません」

逆田が一呼吸置いたとき、年配の男のコーディネーターが口を開く。

「『躊躇なし』や『一気呵成』という言葉を並べるが『待ったなし』どころか『待った、待った』の連続。これでは被災者は不信感を抱きます」

「不信感どころか、政府をまったく信用しません」

「増税、特に消費税の増税についてはどうですか」

逆田が議論の方向を示す。

「増税は切り札です」

中年の男性が口火を切る。

「それに公務員給与の削減も切り札です。国会議員の定数や歳費の削減は余り効果がありませんが、公務員以上にボランティア精神を求めるべきです」

「それはあの橋本市長の考え方と同じですね」

「受け売りと言われても構いません。正論は正論です」

逆田が興奮するコーディネーターから視線を女性のコーディネーターに移す。

「議員は本来無報酬であるべきですが、そうなれば金持ちしか議員になれません。その昔、貴族議員といって高額な税金を納付している者しか議員になれませんでした。しかも選挙できる人も一定の納税額のある人しか資格がなかった」

「そうなると庶民の声は国政に届きませんね」

「そう言う制限がなくなって普通選挙制度になったと言っても、国政がよくなった訳でもない」

「一般論としてはよくなった……」

逆田が両手を少し持ち上げて待ったを掛ける。

「国会議員の歳費の削減は彼ら自身のモラルとして必要だが、これによって節約できる金額は知れているということですね」

「そうです。定数削減は時間がかかります。即効性はありませんが、今から具体的な削減案を準備しておく必要はあります」

「それでは公務員の給与カットは？　あるいは人員削減については？」

「まず給与カットすべきです」

「どのくらい？」

「少なくとも民間の給与水準に合わせるべきです」

「確かにそうですが、民間企業と言っても様々な業態給与体系があります。どのようにして水準を会わせるのか。私は決して公務員を擁護しているのではありません。私も同じことを考えたのですが、大蔵省だけを捉えても、国税庁の税務職員の給与をどのような業態の民間企業と比較して給与を決めるのか……」

「警察官をガードマンの給与水準にするという訳にはいきませんね」

「消防士もそうですね。比較する民間企業がありません」

「公務員の給与の総平均と民間のそれと比べて越えた部分をカットするしかないなあ」

「それはかなり乱暴なやり方だ」

反論されたコーディネーター自身もこの意見に頷く。少し間が開く。逆田はそれほど難しい問題だと浮き彫りにできたことが議論の成果だと割り切って矛先を変える。

「民間と給与水準を合わせることができたとして、公務員の働きぶりについて評価しなければ

なりませんね。昇給やボーナスの査定です。民間の場合、会社の業績、社員の貢献度によってボーナスの査定が行われます。一番はっきりするのは営業成績です。つまり売上や利益にどれだけ貢献したのか、ということです。公務員の場合、利益や売上という概念は馴染みにくい。この辺についてはどう考えればいいのでしょう？」

「ずばり、効率ですね」

「そうだわ！　儲けは少ないけれど、私は必死になって、それこそ寝る時間も惜しんで仕事をしているわ」

「そうしないと食っていけないもんなあ」

「そんな暢気なこと言ってるから売れないのよ」

「まあ、まあ。それではまず効率を高めるには？」

「橋本市長の主張と重なりますが、たとえば被災者のために頑張って働くと言うことです」

「そうすれば、『よくやった』と国民も公務員の給与を減らせとは言わないでしょう」

「公務員にも生活があります。緊急事態ですから多少給与は減額させるとしても、彼らも消費者です。消費して貰わなければ経済そのものが縮小します」

「要はみんな必死になって働いて必要な消費をすることです」

「今の公務員の働きぶりでは民間と比べてその働き方が質的にも量的にも劣っているということですね」

逆田の言葉に全員が頷く。

「そのとおりです。よく働いているなあと感心する公務員はほとんどいません」

「職場環境が悪いと思います。悪しき環境が何十年、そうですね戦後の十数年間はともかくとして、もう六、七十年も同じ公務員制度が継続されました」

「維持された公務員制度の中で一番問題なことは、一言で言えば何ですか」

「キャリア制度だ！」